

第19回高校化学グランドコンテスト 口頭発表講評

相川 京子（お茶の水女子大学理学部化学科教授）：

大学の教員と連携した最先端の研究から、地域に固有の貴重な物質を対象にした研究、校内で使うことができる装置や器具を駆使して創意工夫を凝らして進めた研究など、どの課題も興味深く、感銘を受けながら発表を聞きました。この活動を通じて、チームでの協働やコミュニケーション力の大切さも大いに感じたことと思います。この経験を今後の研究や探究活動に役立てていただきたいと思います。

笹森 貴裕（筑波大学数理物質系化学域教授）：

それぞれが研究に対する想いをこめた、よい発表が多かったと思います。

やや話すスピードが速かったり、細かい事がたくさんかいてあるスライドが見えにくかったり感じるものがあつたので、落ち着いてゆっくり話して、スライドには重要なポイントを大きく記載する、といったような工夫がもう少しあると良いと思いました。

質問の意図をつかみきれないときは、しっかりその質問の意図を聞きかえして、有意義な討論になるように意識することも重要かと感じました。

巽 和行（名古屋大学名誉教授・元 IUPAC 会長）：

皆さんの素晴らしい研究成果発表を楽しく拝聴させていただきました。大学での専門的研究に匹敵する成果もありましたし、地元の生活文化に根ざした研究発表もありました。どれもレベルが高く、高校生の皆さんの強い熱意を感じるものばかりでした。指導された先生方のご努力にも感謝いたします。今回は、英語での発表が減ったのが少し残念でした。せっかくの機会ですので、将来の皆さんの国際的な展開をめざして英語の練習も積んでいただきたいと思います。

中沢 浩（大阪市立大学名誉教授・芝浦工業大学客員教授）：

今年も研究発表内容はレベルが高く、またテーマ設定に工夫が凝らされているものが多く、楽しませてもらいました。本コンテストは高校生が化学の面白さを体感するのに加えて、世界へ羽ばたくことを支援しています。その意味で今回は英語でのプレゼンが少なかったのが残念に感じました。高校生にとって英語発表はハードルが高いかも知れませんが、貴重な機会ですので是非積極的にチャレンジしてもらいたいと思います。

野村 琴広（東京都立大学理学部化学科教授）：

今回も皆さんがしっかりと課題に取り組まれた成果の発表がほとんどで、とても良かったと思います。皆さんの熱意に溢れる発表を聞かせていただき、研究に取り組む原点に戻ったよい機会でした。お礼申し上げます。もう少し英語での発表にチャレンジされてもよかったかもしれません。化学は実験結果を基に筋道を立てるので、個人的には、結果の考察に多少無理があっても、皆さんがしっかりと議論されたのであれば、将来的にはよいかと思いました。

松坂 裕之（大阪公立大学理学部化学科教授）：

自らが取り組んできた研究内容を熱く語る姿に接して元気をいただくとともに、ご指導されておられる先生方が生徒のみなさんを温かく見守ってこられたことが感じられました。なお、前回のコンテストでは口頭発表10件のうち8件が英語での発表でしたが、今回はわずか4件に減ってしまったことは残念です。

山田 鉄兵（東京大学理学部化学科教授）：

今年も楽しませて頂きました。研究は過去の知見の上に何を積み上げたかが重要になります。学校の伝統的なテーマもありましたが、常に新しい視点やパラメータを探し続けることで、ますますの大きな発展があると思います。大学院生の研究と見まがうものもありました。そういう研究はすごいと驚く反面、学生が何に面白さを感じているのかをもっと伝えてもらえたらと思いました。